

旭山動物園 園長

小菅

KOSUGE Masao

正夫

さんに聞きました

二〇〇六年八月一四日
旭山動物園 事務所にて

危機に瀕して、考えた

——今でこそ入場者数日本一の旭山動物園ですが、一時期は閉園の話が出るほど少なかったそうですね。

小菅——一九八〇年代の後半頃からかな、入場者数が減少してきて、これはなんとかしなければと思い始めた。いま思えば、閉園に向かっていたからこそ、動物園とは何か、なぜ必要なのかと根本的なことから考えた。もし順調にきていたら、考えてこなかったと思うよ。当時私は飼育係長になつたばかりで、十人の部下といろんなことを話し合った。一緒に考える仲間がいたというのはよかった。一人で考えるのはなかなか根気がいる

からね。それに、時間があつたことも大きい。旭山動物園の場合、結果的に試行錯誤に十年ぐらいの時間があつた。その点、今の社会はかわいそうだよ。数年で結果を出さなければやめちゃうだろう。

僕は係長になつてからいろいろな事業を立ち上げたんだけど、どんな状態でも十年は続けると宣言した。お客が来ようが来まいがね。十年の間は、前の年のことを反省して翌年に活かすことができると思う。失敗したときに徹底的に分析して、次に活かす。それをせずに次に進んだつて、意味がないからね。でも十年そうやってだめなら、方向性が間違っていたか、やり方が根本的に間違っていたか、どつちかだ。それ以上努力しても結果は出ないと思うんだね。僕はあと戻りが嫌いなんだ。間違えた、と思つても、引き返すのは

いやなんだ。その代わり、右か左か考えるときには、とことん考える。右に行くか決めたら、あとで、いやあそこで間違えたなと思つても元には戻れないんだからね。だめなら引き返せばいいや、という程度の決断なら、途中で気持ちが悪えてしまう。

科学者の義務

——かつて旭山動物園のローランドゴリラがエキノコックス症で死亡し、大騒動になつたことがあると聞きました。

小菅——エキノコックス症は、キツネの排泄物に含まれる寄生虫の卵が動物の体内に入つて増殖して、肝機能障害で死に至る可能性がある感染症なんだ。手洗いなどの対策をしつかりすれば、人間への感染は防げる。一九九四（平成六年、

聞き手



前田瑛美
学生編集委員



川崎文義
学生編集委員

エキノコックスでゴリラが死んだとき、その事実を公表する必要はないという意見もあつたけれど、動物園は公表する方向で動いた。

さつきも言ったけれど、僕は分かれ道ではとことん考える。考え方はこうだ。あつちの道とこつちの道、それぞれ最悪の状況を想定して比較する。そして、最悪でもいいと思えた方向に行く。

事実を公表せずに隠した場合に起こりうる最悪の事態、それはなんの対策もせずにおいて、動物園が原因となつて来園者が感染することだ。一方で、公表して起こりうる最悪の事態は、エキノコックスの実態がきちんと伝わらず、世にも恐ろしい伝染病であるかのような印象を与えてしまつて、非難轟々、旭山動物園なんてやめちまえ、となることだ。でもこの件の場合、もつと大切



なことがある。僕は獣医師、科学者なんだ。科学者がここにいるならば、自分たちが知っていることを世の中に周知していかなければならない。科学者がいるということとは、責任をもつということなんだよ。科学者の責任とは、この場合、公表した結果どうなるか憂慮することではなくて、事実はどうで、どういうことが考えられるかを世の中に伝えることだ。隠したまま動物園を続けるという判断は行政判断、科学者の判断ではない。そうやって公表することに決め

た。それからの三日間はもう、大変だったよ。というのも、エキノコックスでゴリラが死んだ事実を公表するだけじゃパニックを引き起こすだけだからね。「エキノコックスについて」、「ゴリラが感染した原因」、「今後の対策」、この三点を伝えなければならぬ。特に対策はしっかりしなくちゃいけない。僕はかつて旭山動物園の特別展でエキノコックス展を担当したこともあったから、この病気に関する知識はもっていた。けれど、今後の対策を考えると、それはも

う大変だよ。動物園だけの対策じゃない。保健所やら学校関係者やら、とにかくすべての関係者で集まって、三日間ほとんど徹夜で対策会議をやった。具体的な対応の内容から予算の話まで、全部ね。そうやって三日後に記者会見をすると、報道っていうのはどうしてなんだろうね、三日間隠してたって言うんだよ。おまけに、危惧していた通りエキノコックスの現状が正しく伝わらなかったこともあって、会見後の数日は、抗議、抗議の嵐だった。しかし隠していることは何もなし、こちらの対応はただひたすら事実を伝えるだけだよ。動物園に來られた方が心配して、泣きながら問い合わせられてこられることも多かった。血液検査を実施したこともあったね。事実を伝えて、あとはこういった目の前の対応をひとつひとつきちんとやっていくこと。これは行政の大切な責任のひとつだね。こんな感じで当時はさんざん非難されたが、間違ったことはしてない、公表することが正しいという信念があったから、動じることはなかった。科学者として恥ず

かしいことは何もないと。そうしている、ゆくゆくは世間もわかってくれる。お客さんも戻ってきた。十年後、日本獣医師会からも適切な対応だったと評価されたしね。

高い理想を掲げる

——近年、元気がない土木業界に一言。

小宮——旭山動物園の目標は、地球を救うことなんだよ。こう言うと、みんなフフと笑うけど、ほんとだよ。それぐらいの気持ちで取り組まないと、力が出ない、もういいやと思っちゃうじゃない。野生動物も人間も昆虫も、山も川も海も、地球上のものはみんな地球そのものだ。「この地球を救うためにやっている」、うちの職員はみんなそう思ってるよ。

——これからの土木のことを考えるのは土木の人の仕事だけど、土木だって同じじゃないかな。例えば、自然と人の共生なんて永遠の課題だよ。国をつくっているのは土木なんだから、解決すべき課題はいくらでもあるよ。

——本日は貴重なお話をありがとうございました。